令和7年度 泉中道徳通信（第2号）

宇都宮市立泉が丘中学校
道徳教育担当　石川　寛

今回のテーマ
「平和」と「命」を見つめて

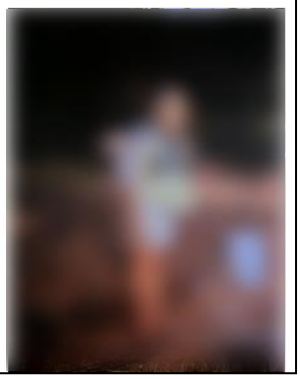
第１号でもお伝えしましたが、戦後 80 年という節目を迎えた今年度は、改めて「平和」や「命」の大切さを見つめる時間を大切にしています。１０月１日に行われた生徒会執行部主催の〈命の尊さを考える会〉では、次のような内容を通して考えを深めました。

「焼き場に立つ少年」戦争の悲劇を物語る一枚の写真

この写真は、第二次世界大戦末期に長崎に原爆が投下された直後、アメリカ海兵隊の写真家ジョー・オダネルによって撮影された一枚のモノクロ写真である。

この写真には、弟の遺体を背負い、唇を固く結び、直立不動で火葬の順番を待つ少年の姿が写し出されている。弟を背負う彼の姿勢は、まるで眠っている弟を起こさないようにしているかのようだ。戦争の悲劇と、その極限状況の中で見せる人間の尊厳と強さを静かに物語っており、見る者の心を強く揺さぶる作品として、世界中で知られている。

この写真は、単なる歴史的記録にとどまらず、戦争の非人道性、そして平和の尊さを伝える象徴として、今もなお多くの人々に語り継がれている。



補足：集会では右の QR コードの動画の一部を視聴しました。

朝日新聞　天声人語「被爆８０年、広島」
2025 年 8 月 6 日の新聞記事を朗読する。

上の天声人語を読み、次のように問いかけました。

天声人語に「13歳の少女が、生きたくても、生きられなかった明日に、いま、私たちは生きている。だから、考え続けたい。どうして瑤子（ようこ）さんの大切な命は失われたのか。誰のせいか。何のためかーー。」という問いがありました。これに対する、あなたなりの思いや問いを入力してください。

この問いかけに対する代表的な回答を裏面に紹介しますので、ぜひご覧ください。

下の写真は、広島の平和記念式典に贈呈された本校生徒作成の千羽鶴です。これらの写真は、式典に参加した生徒から提供していただいたものになります。

●２月のピンクシャツデーに向けて

泉が丘中学校では、日本の「いじめ反対の日（ピンクシャツデー）」である２月最終水曜日に向け、ピンクシャツのデザインを募集する取り組みを令和５年度より行っています。今年度も後期生徒会執行部が中心となり「ピンクシャツコンクール」を実施する予定です。右のデザインは、昨年度の最優秀賞に輝いた生徒の作品です。今年度はどのような作品が集まるのか、今からとても楽しみです。

いじめをなくすためには、誰もが被害者の立場を想像し、その気持ちに寄り添う心が欠かせません。デザインの制作にあたっては、次に示す例の意味をしっかりと理解し、思いを込めて取り組んでほしいと願っています。

・〈被害者視点〉を重視する。受け止め方によっては誤解を招くようなデザインは不可とする（例参照）。

例１
特定の誰かを連想させ得るデザイン。

例２
被害者の気持ちに対する配慮が不足したデザイン。

例３
笑いの要素が強すぎるデザイン。暴力で解決を促しているという誤解も招き得る。

令和７年度も締めくくりの時期を迎えました。この１年間をいかに振り返り、来年度へとどのようにつなげていくか――。今は、そのために重要な時期にあります。

最後まで学級で協力し合い、全員が納得のいく形で今年度を終えられるよう、この「ピンクシャツデー」を、改めて「いじめ」とはどのようなものか一人一人が深く考える機会にしてほしいです。

（右のポスターは３年生の作品です。）

★「１３歳の少女が、生きたくても、生きられなかった明日に、いま、私たちは生きている。だから、考え続けたい。
どうして瑤子（ようこ）さんの大切な命は失われたのか。誰のせいか。何のためか――。」という問いに対する生徒たちの考え。

１年

過去の犠牲を「平和の教訓」として生きる

　戦争とは、日常の幸せを理不尽に壊す残酷なものだ。たとえどのような理由があろうとも、一人ひとりの大切な命を奪うことは、決して許されない。今この瞬間も、世界のどこかでは争いが絶えず、多くの涙が流されている。

　なぜ、今の日本に平和があるのだろうか。それは、かつての悲惨な戦争を経験し、先人たちが「二度と繰り返してはならない」という教訓を残してくれたからだと思う。もし過去の痛みを知らなければ、私たちは今、同じ過ちを犯していたかもしれない。

　今の平和は、尊い犠牲の上に成り立っている。私たちは、過去からの平和へのメッセージを未来につなぐ義務があるはずだ。歴史を深く学び、その重みを胸に刻むこと。それが、これからの平和を築く第一歩になると信じている。

戦争が奪った「日常」と向き合う

　戦後八十年という節目に平和学習の集会に参加し、戦争の無責任さを強く感じた。国を強く見せるためや意見の相違だけで、多くの尊い命を一瞬で奪うことは決して許されない。たとえ対立しても、互いを尊重し対話で解決する姿勢が今の私たちには必要だ。

　集会で聞いた、被爆者の「生きているから、考えたい」という言葉が心に残っている。私たちが当たり前のように享受している食事や家族との時間は、戦争によって一瞬で消し去られてしまう。「なぜ」という消えない悲しみを抱え続けてきた方々の思いは、計り知れない。

　私たちは、戦争を「過去の出来事」と切り離してはいけない。今もウクライナ等のニュースを見れば、罪のない命が失われており、決して遠い世界の物語ではないのだ。

　平和な日常を大切にしながら、二度と悲劇を繰り返さないために考え続けたい。戦争を悲しい過去で終わらせず、過ちを繰り返そうとする動きと戦い続けること。その意志が、平和を築くと思う。

２年

学びは「共存」のためにある

　いかなる理由があろうとも、戦争という道を選ぶ考え方を私は理解できない。なぜ、共に生きる「共存」の道を選べないのだろうか。

　私は、学校へ通う一番の理由は「人間関係」を学ぶためだと考えている。自分と違う意見を持つ人とどう向き合い、関わっていくか。それを体験するのが学校という場所のはずだ。実際、私も学校生活で他者と衝突したことがある。だが、互いの思いを伝え合った結果、考えが違っても歩み寄り、共存できることを学んだ。

　戦争を決める人々の中にも、かつて学校で人間関係を学んだ人はいるはずだ。それなのに、武力で命を奪い合う選択をするのは、学びを活かせていない証拠ではないだろうか。　戦後八十年。私たちは歴史を知り、学ぶことができる。その学びを知識で終わらせず、共存するための力に変えたい。戦争をしない国、人間であるために。これからも人との関わりを学び続け、胸を張れる人生を歩んでいきたい。

命を知る

　瑤子さんの命は、人間の浅はかな考えによって失われた。原爆投下を命じた指揮官、戦争を止めなかった指導者、そして反対の意思を示さなかった国民。戦争に関わったすべての人の選択が、一人の少女の命を奪ったのだ。

　爆弾を落とした側にとって、それは「〇〇を殺した」という実感ではなく、「作戦の成功」という認識にすぎなかったのではないか。瑤子さん本人にとって自分の命は一つだけの尊いものだが、他者から見れば、膨大な犠牲者という「数字」の一部にされてしまう。この「自分以外の命を軽く見る考え方」こそが、戦争の恐ろしさの正体ではないだろうか。

　これ以上犠牲を出さないためにできることは、一人ひとりに人生があったという事実に想像力を働かせることだ。命を単なる数字として処理せず、血の通った一人の人間として感じること。その個々の命と向き合える感性こそが、戦争を止める力になると考える。

３年

過去の願いを、今続く戦争を止める力に

　戦争で亡くなった人々の多くは、瑤子さんのように、当たり前の未来があるはずだった。今の平和は「自分を犠牲にしてでも未来を救いたい」と願った、数えきれない人々の切実な思いの上に成り立っているのではないか。

　しかし、目を向ければウクライナやガザでは今も戦火が絶えない。戦後八十年、平和を享受してきた日本の体験こそ、今の戦争を止める「力」になるべきだ。広島や長崎の悲惨さや人々の心の痛みを、国際社会へもっと発信していく責任が私たちにはある。

　今、核兵器の危険と隣り合わせで生きている。核を脅しに他国を支配しようとする現状に、私は強い憤りを感じる。誰もが「明日」が来ることを疑わない時代にするために、私は、これまでに培った文章力を武器に、平和への声を上げ続けたい。過去から託されたバトンを、確かな未来へと繋ぐために。

「傍観」は「寿命」を捨てる

　人は皆、生まれた時に「寿命」というかけがえのない宝物を授かる。僕たちは日々、それを大切に使いながら生きている。しかし戦争は、この「寿命」を使い切る前に無理やり奪い、まるでゴミ箱に投げ捨てるようにして命を消し去る。こんなにも残酷なことが、なぜ起きてしまうのか。僕は、特定の誰か一人の責任だとは言い切れないと思う。目の前の悲劇をただ「傍観」することは、その行為に加担するのと等しいからだ。

　戦後八十年、私たちは平和を享受している。だが今も世界のどこかでは、誰かの「寿命」が奪われ続けている。何もせず黙って見ているだけの自分も、決して無傷ではいられないはずだ。僕の、あるいは誰かの一言が、何かを変えるきっかけになるかもしれない。平和を維持するには、一人ひとりが「傍観者」にならない勇気を持つことが必要だと強く感じる。その第一歩として、僕は悪いことは悪い、良いことは良いと、はっきり口にできる人でありたい。